

トップ	東北	内外	スポーツ	特集	KD	ふらっと	動画・シネマ	暮らし	情報誌	就職・進学	ショッピング
宮城 青森 岩手 秋田 山形 福島 広域 分野別 河北春秋 河北抄											

社説

東日本大震災 いのちの電話／被災者を思う心のつながり

震災で肉親を亡くしたり、家を流されたり、言葉に言い尽くせない辛酸をなめた人たちが立ち上がるためには、そのつらい思いを一人で抱え込まず、誰かに話すことも重要だという。

被災地にある「いのちの電話」の関係者も被災者の心を支えようとしたが、停電などで電話の復旧が遅れた上、相談員にも被災した人が多く、やむなく断念した。

いのちの電話とは、「生きる意味を見失った」と悩む人々からの電話相談に、24時間体制で応じている市民ボランティア組織だ。

東北で最も早く1982年に設立されたのが、仙台いのちの電話。震災後の対応について本田登代子事務局長は「相談員が震災のショックで気持ちが混乱したままでは、相談業務はできないと判断した」と説明する。

そこで被災地のいのちの電話に代わって立ち上がったのが、社団法人「日本いのちの電話連盟」だった。

3月下旬、発信地を岩手、宮城、福島、茨城に限定して、全国の相談員が被災者の相談を受け付けるフリーダイヤルを設けた。このダイヤルは4月9日にいったん終了したが、被災地から約1500件の電話があったという。

連盟事務局によると、被災者は「余震が怖い」「眠れない」「風評被害に怒りを感じる」「被災地の現実をもっと知ってほしい」と訴えたり、「生き残ったことに罪悪感がある」と打ち明けたりした。

このフリーダイヤルは、連盟の呼び掛けに対して全国数十カ所のいのちの電話が参加したことで実現できた。被災者の電話を全国各地の相談員が次々と受けるシステムで、東北からかけた電話が遠く九州、中国地方の相談員にもつながった。

どこのいのちの電話なのか、相談員は相手に伝えることにしていたといい、これが被災者の專線に触れた。「そんなに遠くで、私たちのことを考えてくださっているのですか」と、感謝の言葉が返ってきたという。

義援金や食料、物資の支援はもちろん必要だ。と同時に、どこかで誰かが支えてくれてという心のつながりが、未曾有の大災害から東北が復興するためには欠かせないだろう。

その意味で、いのちの電話のネットワークが果たした役割は極めて大きいのではないかと。

仙台いのちの電話は4月下旬、大災害の中で相談の在り方を考える勉強会を開催した。「被災者を二次的に傷つけないように細心の注意が必要。どのように話を聞いたらいいかなど、心理的サポートの方法を学んだ」（本田事務局長）という。

連盟も今後、大震災フリーダイヤルの再開を目指し、ワーキングチームを設立する。他県への避難者も多い実態を考慮し、発信地を被災地に限定した方法を見直すことも含めて改善策を検討する方針だ。

被災者の支援は、まず相手を思うことから。いのちの電話の仲間たちが全国で展開した今回の活動は、そうした基本をあらためて教えてくれた。

2011年05月04日 水曜日

印刷用ページ

Ads by Google